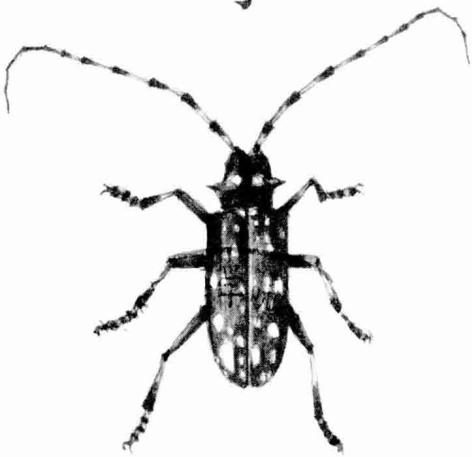
惑い

津村節子

惑い

津村節子



読売新聞社

惑い

著　者――津村節子

編集人――杉林　昇

発行人――堀内　稔

発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇-五五
大阪市北区野崎町八の一〇　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所――凸版印刷株式会社

製本所――大口製本印刷株式会社

第一刷――昭和六十二年十月三十一日

第三刷――昭和六十二年十二月二十七日

定　価――一、二〇〇円

ISBN 4—643—87082—6　C 0093

©1987, Setsuko Tsumura

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

惑い　目次

惑い　7
再会　25
葱　47
小さな旅　67
銀色の口紅ケース　83
流星　109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

白い手袋　135
遠い呼び声　163
櫛　185
あとがき　211
初出誌一覧　213

装画・装丁　淡谷次郎

惑い

小説集

惑

い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その日、夫の甥の繁が山口から上京してくることになっていた。
引越荷物が片付くまで、祥子たちの家に泊る予定である。荷物といっても学生のことで、寝具や衣類少々、机や本箱ぐらいだという。自炊するための道具類はこちらで買うとのことだから、片付けるのも簡単だろう。
「多分、一日か二日のことだ」
と夫は言う。そのくらいなら、と祥子は承知したのだった。
はじめ夫から持ち出された話は、繁を同居させたいということだった。ローンで建てた小さな家だが、いずれ美和の部屋に、と二階に一間とってある。
「同居？　とんでもないわ」
祥子は、驚いて声をあげた。女なら役に立つということもあるが、男の学生などきたならしくて、部屋の掃除や洗濯など世話ばかりかかる。
夫の帰宅はいつも二時、三時で、夕食は娘の美和と二人で簡単に済ませることが多い。それも面倒な時には、店屋ものをとったり、外へ食べに行ったりすることもある。

「とても、面倒みきれないわ」
「本人は、お世話はかけない、と言っている。食事のことだけしてやればいいさ。どうせ二人も三人も同じ手間だ」
夫は至極簡単に言う。そこが男にはわからないのだ。
「うちうちなら、あり合わせで済ますことも出来るけれど、他人がはいればそうはいかないわ」
「他人じゃない。おれの甥だ。それに学生だから、気がおける相手じゃない」
「あなたの甥でも、私には他人だわ。外へ出て遅くなったときなんか、インスタントラーメンで済ませちゃう時だってあるけれど、まさか繁君にインスタントラーメンだけというわけにはいかないじゃないの」
「それでいいさ。学生なんかに何をそんなに気を使うことがあるんだ」
「繁さんだけのことじゃないわ。繁さんのおうちの人たちのことも、私は考えてしまうわ。いい加減なことばかりしていると思われたくないわ」
夫は、呆れて祥子の顔を見た。
「繁が、いちいちうちの様子を報告するとでも思っているのか」
「とにかく、嫌なのよ。私の肉親でも同じことよ。家の中のバランスが崩れてしまうわ。絶対嫌ですからね」
「わからずや、何という狭い了簡なんだ」
夫は怒って荒々しく立ち上ると、食事もなかばで出て行ってしまった。珍しく夕食に間に合うよ

うに祥子の好きな店の洋菓子などを買って帰って来たのは、その話のためだったのだ。多分、兄の家には調子のいい返事をしてしまったのだろう。

しかし、ここで折れては必ず後悔する、と出て行く夫をとめなかった。かれは飲んでかなり遅く帰って来たが、繁のことはもう口にしなかった。

祥子はさすがに気がとがめて、夫に済まないような気持を抱いたが、だからと言って繁を下宿させるつもりは毛頭なかった。夫は情のこわい女だと思っただろうが、どう思われようと家庭の平和は守らねばならない。繁の同居をいまことわるよりも、同居してから気まずくなるほうがもっと問題は深刻になる。

そんないきさつがあったので、祥子は繁のアパートが片付くまでかれを家に泊めることには、快く同意したのだった。自炊に早速必要だろう、と不要になった鍋や余分にある庖丁、結婚式の引出物に貰ったポットやコーヒーセットなどを出して一まとめにし、かれのアパートに運んでやるつもりである。

繁が現れたのは、祥子が夕食の準備を始めようとしている時だった。ブザーが鳴ったので玄関の扉を細目に開くと、陽焼けした肩のいかつい感じの青年が立っていた。

写真で見ると童顔なのでまだ子供のように思っていたが、玄関の三和土（たたき）に立った繁は少なくとも肉体的にはまぎれもない大人で、祥子は圧倒されそうな感じを受けた。

「まあ驚いた。繁さん？」

「初めまして、母がよろしくと言っていました」

祥子が何に驚いたのか繁はわかるまいが、母に言われたらしく神妙な挨拶をした。
七歳になる美和は一人っ子なので、おにいちゃんが来ることに期待を抱いている様子だったが、ドアのかげにかくれて出て来ない。繁は、祥子に案内されて食堂兼用の居間に通るときに美和に気づき、
「やあ、美和ちゃん」
と親しげに声をかけた。
「美和、そこにいたの？　おにいちゃんに御挨拶なさい」
美和は、恥ずかしがって姿を見せない。
「初めは少し人見知りするんです。すぐ馴れるんですけどね」
祥子は言いながら、お茶の支度をしに台所へ行った。紅茶をいれ、ケーキと一緒に居間に運んでくると、美和はボストンバッグをあけている繁の傍にしゃがみ込んでいる。何と言って美和を呼んだのか知らないが、彼女が初対面の客にこんなに早くなつくのは異例のことであった。
繁は、バッグから出した土産の菓子やかまぼこなどをテーブルの上に並べると、
「美和ちゃんには何もお土産がなくて悪かったね。あしたお兄ちゃんと買いに行こう」
と、美和の頭をなでた。
「美和にまでそんな心配なさらないで」
と祥子は言ったが、美和はおにいちゃんと買物に行くのが嬉しそうだ。
祥子が夕食の支度をしている間に、美和はすっかり繁になついてしまった。繁は長男で、弟妹た

ちの扱いに馴れているのかもしれないが、生来子供好きで、気持がやさしいのだろう、と祥子はかれに好印象を持った。

繁が来るので、夫は祥子に気をかねてか、夕食に間に合うように帰宅した。若い男なら肉がいいだろう、と祥子はすきやきの準備をし、四人で鍋を囲んだ。

「わあ、御馳走ですね」

繁は遠慮なく箸を進めたが、がさつな感じはない。話し方も、率直だが節度があって、久しぶりに賑やかな夕食は、祥子も楽しかった。

寝室にはいってから、

「わんぱくのガキ大将だったが、心配することはないものだな」

と、夫が感慨深げに言った。祥子も、思ったより遥かに好ましい青年だと思ったが、あれほど頑なに同居を拒んだ手前、それを口にしなかった。

翌日、繁はアパートの掃除に出かけた。午後トラック便で荷物が着くと言う。祥子は手伝いに行こうかと思ったが、女手がいるのは道具類が所定の場所に納まってから、こまごました物を片付けたり、不足の物をチェックしたりする時だろう。

学校から帰って来た美和は、走って来たらしく息をはずませながら、

「おにいちゃんは？」

と真っ先にたずねた。

「お引越で、アパートへ行ったわ」
「アパートなんかにはいらなくても、うちにいればいいのに」
「お勉強に来たのだから、一人のほうがいいのよ」
「美和とお買物に行く約束、忘れていないかな」
「美和ったら、おにいちゃんに催促なんかしちゃだめよ」
祥子はたしなめたが、美和は学校でそればかり考えていたようだ。
繁は、美和の期待を裏切らず、早目に帰って来てシャワーを浴びると、彼女を連れて出かけ、赤い毛糸で編んだポシェットとレッグウォーマーを買って来た。
「女の子の欲しがる物ってほんとわかりませんね。どちらも何をするものかわからなかったけれど、流行なんですって？」
ぬいぐるみか人形でもねだられると思っていたらしい繁は、こんなに小さい娘がすでにファッションに関心があることを知って驚いていた。
かれはついでに、デパートで物産展をやっていたから、と北陸の一塩の干物など買って来た。早速翌朝の食事に間に合う。女なら役に立つが、男ではきたならしくて世話ばかりかかる、と思っていた祥子は、かれの気のつき方に驚いていた。部屋はきちんと片づいているし、蒲団もきれいにたたんであった。
人の家に厄介になるということで、かれなりになるべく余計な手間をかけさせまいと神経を使っているらしい。だらしのない娘よりも余程ましである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com